みもすそ

伊勢神宮崇敬会だより

特集
参宮街道の町並み

お伊勢さんの歳時記

4月2日　神田下種祭
3日　神武天皇祭遥拝
14日　大麻用材伐始祭
20日　植樹祭
28～30日　春の神楽祭
30日　大祓
5月1日　神御衣奉織始祭
13日　神御衣奉織鎮謝祭
14日　風日祈祭
神御衣祭
31日　大祓
6月1日　御酒殿祭
15～25日　月次祭
30日　大祓

内宮を流れる五十鈴川は、倭姫命が御裳を濯がれたことから「御裳濯川」（みもすそがわ）とも雅称されます。題字は本会会長の松下正幸による浄書。表紙は、千本格子の妻入民家がつづく市場庄の町並み。

第98号
令和3年　春

東海道五十三次の宿場町
豪商を生んだ城下町
斎宮から伊勢への街道
おかげ参りの時代を彷彿させる
懐かしい町並みを歩きます

鈴鹿峠を望む関宿。中央に見えるのが関地蔵院。

特集 参宮街道の町並み

おかげ参りが盛んだった江戸時代、伊勢へ向かう街道は多くの旅人で賑わいました。いぶし瓦に千本格子、漆喰壁や杉の下見板貼り…旧街道筋には、今なお往時の面影を伝える町並みがいくつか現存しています。同じように見えて、地域の個性が現れる参宮街道の建物を、伝統建築に明るい建築家と訪ねました。

東海道四十七番目の宿

歌川（安藤）広重の浮世絵で知られる東海道五十三次。徳川幕府が設けた宿場のうち、江戸から四十七番目に当たるのが亀山市の関宿です。東西約一・八キロの通りには江戸から明治期の町家二百軒余りが軒を連ね、昭和五十九年に東海道の宿場町では初めて国の重要伝統的建造物群保存地区に選ばれています。

通りに面した町家のほとんどが、平入の厨子二階。格子を巡らせた見世の間や玄関上部の部屋を低くした造りで、二階は物置や使用人の寝泊まりに使われていました。開口部には漆喰で塗りごめた虫籠窓や、縁起をかついだ漆喰彫刻が見られます。かつて牛や馬をつないだ環金具や、腰掛にもなる可動式棚バッタリが残っているのも、旅籠や商店がずらりと軒を連ねた関宿ならでは。

伊勢別街道が分岐する東の追分には、ご遷宮で役目を終えた内宮宇治橋の鳥居が移設されています。

通りの中央に建つ関地蔵院（国重要文化財）の向かいには関宿を代表する旅籠のひとつ、会津屋があります。

「屋根が膨らんでいるでしょう。むくり屋根と言って、富の象徴だったようです。会津屋の隣三軒は、明治、大正、昭和と時代順に建物が並んでいるんですよ」

関宿のボランティアガイドもされる菓匠「深川屋陸奥大掾」の十四代当主・服部亜樹さんが教えてくださいました。

「関は幕板の位置が独特ですね」

同行をお願いした伊勢の一級建築士・萩原義雄さんが、軒先に垂れた板に目を止めました。一階の庇に取り付けて風雨から人や建物を守る板のことで、一般的には庇の先端に付けられますが、なぜか関では庇のかなり内側にあります。

「当時の大工さんの意匠かもしれませんね」。服部さんが言うように、その町独特の景観は、一人の大工が弟子に伝え、その弟子が孫弟子にという具合に地域へ広まって形成されていったのでしょう。

「江戸時代は通りの高さが現在より三十センチ程低かったので、しゃがんで通りを眺めると、往時の気分が味わえますよ」

服部さんの解説は、興味が尽きません。

卯建の上がる豪商の町

「明日はおたちか、お名残惜しや、六軒茶屋まで送りましょ……」

道中伊勢音頭に唄われる六軒は、現在の松阪・市場庄町あたり。かつて六軒の茶屋が並んでいた宿場町には、ゆるやかに蛇行する街道沿いに、千本格子の美しい妻入民家や土蔵がひしめいています。

市場庄・松阪

7／江戸で一番の紙問屋だった小津清左衛門家の邸宅。博物館として公開されている。
8／2棟をつなぐように、広い間口に取り付けられた袖壁と卯建。（旧長谷川治郎兵衛家）
9／本町の平入民家。漆喰塗りの袖壁は、火災時の延焼を防ぐためのもの。

■旧小津清左衛門家　月曜休館。
松阪市本町2195　TEL.0598-21-4331

市場庄では平入と妻入の家が同居する。
入母屋は近年の屋根様式。

1／深川屋さんの玄関にある擦り上げ雨戸。屋内上部に仕舞われる。
2／京都側は漢字、江戸側はひらがな（右頁写真）になっている庵看板。
3／むくり屋根は、繁栄した家の象徴。
4／火炎宝珠を象った玉屋の虫籠窓。
5／牛をつないだ環金具。
6／バッタリ（ばったり床机）は、上げ下げできる便利な店棚。腰掛けにも。

関宿

■関宿旅籠玉屋歴史資料館
江戸時代に建てられた大旅籠に、歴史資料を展示。　月曜休館
亀山市関町中町444-1　TEL.0595-96-0468
■深川屋陸奥大掾
創業380年、銘菓「関の戸」で知られる老舗。　木曜定休
亀山市関町中町387　TEL.0595-96-0008

明星（みょうじょう）

1／平入（左）と妻入（右）の建物が向かい合う。
2／スギ板きざみ囲いを黒く塗装。破風下のせり出しは張り出し南張囲い。
3／妻入むくり屋根の家。雨戸の戸袋を室内とすることで、端正な外観に。

民家に詳しい伊勢の一級建築士・萩原義雄さん。「みえ木造塾」を主宰し、校倉造りの家など伝統建築の知恵を現代に生かしている。

「旧街道には平入が多いのですが、伊勢が近くなるにつれ、妻入の割合が増えてきます」と萩原さん。半農半商の家が多かった市場庄から松坂城下へ入ると、平入が優勢になります。

とりわけ見応えがあるのは松坂城址の北東。戦国末期、近江から入城した蒲生氏郷が故郷から呼び寄せた家臣や商人を住まわせた魚町、本町筋です。板塀に囲まれた黒塗りの蔵や町家は、観光スポットになっています。

三井家、長谷川家、小津家など、江戸店持ちの豪商はここで生まれました。商家の二階に袖壁があるのは、火災時の延焼を防ぐため。その上部に瓦屋根を付けたものが「卯建」で、「うだつの上がらない」という言葉があるように、卯建は成功者の象徴でした。旧小津家、長谷川家は、豪商の暮らしを伝える博物館として公開されています。

平入から妻入へ

明和町は、松阪市と伊勢市の中間。櫛田川を渡り、近鉄山田線と並行するように参宮街道が通じています。

「この界隈の家の特徴は、ひとつは外壁の『きざみ囲い』。下見板を重ねた木製ユニットで、隣家が火事のときには取り外せるようになっています。屋根の妻側に張られているのは『張り出し南張囲い』といって、雨風にさらされやすい所を守るための板。関では幕板と呼ばれていたものが、当地では『軒雁木（のきがんぎ）』と名称が変わります」。地元とあって萩原さんの説明にも熱がこもります。斎宮を過ぎ、明星まで来ると外壁を黒く塗った妻入民家と土蔵が増えてきます。

「昔はけずり墨を水で溶いて塗っていたそうです。固形墨をつくる際に生じた余り材で、墨に配合されているニカワが保護膜の役目を果たしたのです」

雨が多い日本では、先人たちは雨仕舞いをどうするか、知恵をしぼったのでしょう。各地域の風土に添った家づくりが、特徴ある町並みを生み出しました。

伊勢に切妻・妻入の民家が多いわけは、神宮社殿の平入と同じでは畏れおおいからとする説があります。実際は、玄関側に落ちる雨を少なくしたい、街道や川に沿って建物をできるだけ密集させたいなど、風土の特性や社会的要因も大きかったのでは。これも昔の人の暮らしの知恵や思いの現れでしょう。

3地区3様の幕板
関では庇の中ほどに斜めに設置され、二重庇のよう（右上）。松阪では庇の先端からはみ出すように（右下）。明星では深い軒の先端に、垂直に付けられている（左上）。